

自然價值概念と購買力平價

山口 茂

歐羅巴戰爭が開始すると同時に交戦國をはじめ其他の國々も多く完全なる金本位制度から離脱した、そのため各國の貨幣の對外價值——貨幣價值單位間の交換比率——即ち爲替相場はその變動の中心點としての金平價點を失ふに至つた。即ち爲替相場の變動は法定平價を中心とし金輸出點と輸入點との間に限られて居つたのがその後は金輸送點の消滅により變動が如上の範圍に限らるゝ事がなくその幅が非常に大くなつた。斯の如き状態に立到つた爲替相場にとつてその變動が遂に無制限となり何等據るべき基礎は存在しないであらうか。此の問題に對シカツセル教授は各國の貨幣の對内價值即ち國內に於ける購買力の比率を以て爲替相場決定の基準とする。購買力平價説が之れである。此の購買力平價説の爲替理論としての價值如何に就ては我國に於ても既に貴重なる研究が發表せられて居る。私も是れに和し少しく異なる方面より此の問題を考察し以て購買力平價なるものゝ性質を論じて見たい。

一般に這般の歐羅巴戰爭がもたらした經濟事情の變動殊に貨幣問題は十八世紀の末葉より十九世紀の初頭に亘りて起つた那翁戰爭時代に於て英佛に發生した事情に酷似して居ると言はれて居る。共に一種の不換紙

幣時代を出現し所謂金紙の開きと爲替相場の法定平價よりの著しき逸脱とを發生せしめた。而して後の歐羅巴戰爭に於ける爲替相場の問題に關して提唱せられたカッセル教授の購買力平價説はまた前の那翁戰爭に於ける貨幣問題に關はりて發表せられたりカードの學説に基くとせられて居る。(註一) 貨幣の對内價值の問題をりカードに關りて考へて見た私は茲にその對外價值の問題をも亦りカードの學説より出發して論じて見たいと思ふ。

註 J. M. Keynes: A Tract on Monetary Reform p. 87.

—

大戰の始まると共に世界に於ける主要な國々は、漸次相率いて兌換の停止又は金輸出の禁止を事實上遂行したがために、「完全なる金本位制」の破壊となつた。従來各國間の爲替相場は法定平價を中心として變動したその幅は金の輸送費以内に限られたものが此の基準點を失ふに至つた。その後戰爭の進むにつれて、各國は戰時財政處理の爲め不換紙幣濫發をなさざるべからざるに至り、各國々の物價は著しく奔騰し、且つ其の歩調は各國區々であつた。斯く各國の貨幣の國內的購買力の甚しき下落と同時に、その對外價值である所の爲替相場もまたそれに劣らざる甚しき下落を示した。此の爲替相場激變の事情に對し爲替理論として通説たる需要供給論のみを以てしては充分なる理解をなす能はず。カッセル教授は爲替理論を解明せんが爲めに「外國貨幣に對する需要の主要なる理由、及びその外國貨幣の購買力の變化は、その外國貨幣に對する需要に對して如何なる影響を與ふるか」なる疑問を發し、此の疑問に答ふる事によつて問題の解決をなさんと試

みた。此の疑問に對するカツセル教授の答は次の様である。即ち外國貨幣に對して或る價格を支拂ふは結局此の外國貨幣がその外國に於て貨物及び勤勞に對して購買力を有するが爲めである。また外國貨幣を供給するは、その貨幣が自國に於て貨物及び勤勞に對して有する購買力を供給して居るのである。されば自國貨幣による外國貨幣の評價は二つの貨幣がそれ／＼の國に於て有する購買力間の比較に基いて決すると。而して自國貨幣による外國貨幣の評價は貨幣の對外價值であり外國爲替相場である。即ち爲替相場は兩國貨幣の國內的購買力の正比で定まり、貨幣の一般的購買力の反面たる物價の反比に従ふ。之れがカツセル教授の爲替理論としての購買力平價説である。而して斯くの如き購買力平價は如何にして算出せらるゝかと言ふに、若し甲國に於て通貨が100より321に、乙國に於て100より241に膨脹するとすれば、乙國の貨幣を以て現した甲國貨幣の價格は $\frac{240}{321}$ 即ち四分の三に變ずる。實際爲替相場は一時的變動はあるけれども常に此の購買力平價に一致せんとするものである。(註一)斯く此の理論は貨幣數量説に基いて決定して各國貨幣の國內的購買力の比率をもつて爲替相場決定の基礎とするものである。而して爲替相場は貨幣の對外價值即ち對外國貨幣交換比率であり、また一國貨幣が外國貨幣と交換さるゝ動機がその得たる外國貨幣が當該外國に於て有する購買力を得んとする事なるを以て、國際間に於ける貿易が如何なる貨物に就ても行はれたる國際流通に何等の障害がないと言ふ假定のもとに於ては、購買力平價説は理論として正しきものと言はざるを得ない。而して此の爲替理論が實際の爲替相場決定の上に如何にあてはまるかと言ふ事に就て、また最近各國が漸次金本位制に復歸しつゝある今日金本位國間の爲替理論として正しきか否かに就て既に貴重なる研究が存在して居る。(註二)

註一 G. Cassel: *Money and Foreign Exchange after 1914*, pp. 17-146.

註二 田中金司教授金本位の下に於ける購買力平價説の妥當性(國民經濟雜誌四十三卷三號)

二

以上述ぶるが如きカツセル教授の購買力平價説は歐洲大戰以來の通貨状態、國際金融事情と相通うて居る奈翁戰爭時代の英國經濟事情に關連して發表せられた地金報告に於て主張されて居る。而してリカードは *High Price of Bullion 1811* 及び *Reply to Mr. Bosanquet's Observations on Report of Bullion Committee 1811* に於て同説を述べて居る。即ち一七九七年以後英蘭銀行の銀行券が兌換停止となり、以來英國は金紙の價格の開きと對外爲替相場下落に苦しんだ。その原因と矯正策との研究が地金委員會に委託せられ、地金委員會は一八一〇年に報告書を提出し、金紙の價格の開きは不換紙幣の濫發により、金に對して紙幣の價值下落したるが爲めにして、磅の對外的價值即ち爲替相場も之に應じて下落すると説明した。而してその矯正案としては不換紙幣を爲替相場及び金紙の開きの無くなる迄回収するにありとした。リカードの意見を見るならば次の様に主張して居る。即ち流通手段が磨損せざる貨幣又は正量貨幣に兌換せらるべき紙幣を以て構成せられて居る場合には、爲替相場は貴金屬の輸送費以上に法定平價より離れる事はない。然し若しそれが下落せる紙幣によつて構成せられて居る場合には、爲替相場は紙幣の下落の程度に應じて下落する。故に爲替相場は貨幣の磨損又は紙幣の下落による通貨の下落を判斷し得る略正確な標準となる。(High Price of Bullion. *Economic Essays* (dit. by Tomner 2 10) 流通手段は決して過剰なることはない。若しそれが金銀の

何れかである場合にはその増加額は世界に分散する若しそれが紙幣であるならば、その發行せられたる國內に分散する。而してその物價に對する効果は只地方的でありまた名目的にすぎない。但し外國よりの購買者に對しては爲替の方法で調節される。(28) 即ち不換紙幣の場合にはリカードによれば物價の變動は國內的名目的にすぎないが、國際的に見れば此の物價變動は貿易に影響せざるを得ないが、然しそれは爲替相場が物價變動即ち通貨の價值變動に應じて變動するが故に、國際間の貿易に影響するところはない。斯く此の場合通貨の對内價值の變動に從つてその對外價值も亦變動する。以上の如き見解はリカードが地金報告に對してなされた *Bosquet* の批評に答へたる所に於て益々明である。凡ての國の流通が貴金屬のみを以て行はるゝものとし英國の保有する貴金屬の量が百萬と假定する。若し英國以外の凡ての國の通貨が急に半減し英國のみはそのまゝ變化せずとすれば、英國はその保有量百萬を維持し得るであらうか。また英國の通貨は斯くては他國に比し過剩たらざるを得るか。若し一クオーターの小麥が英國にても佛國にても同様に一オンス金貨と交換されて居つたものが今は佛國ではその價格が金貨半オンスとなり英國にては依然として同一價格を維持するであらう。今英國へ小麥或は他の貨物——何となれば凡ての貨物が同様に影響されるから——の輸入及び英國より金貨の輸出が何等かの法律によつて禁止され然も金地金の輸出が自由ならば金は百パーセントの騰貴を見る。同じ理由により漢堡に於て 35 *Flemish schillings* が 1 *Pound sterling* にあたつて居つたものが 17½ *Flemish schillings* が 1 *Pound sterling* となるであらう。他國の通貨が半減しないで英國の通貨が倍加した場合にも同様の結果を來す。(Reply to Mr. *Bosquet's* Observations on Report of Bullion Committee, *Economic Essays* edit by *Gosner*, § 20)

三

斯くカツセル教授もリカードも同様に不換紙幣時代に對し物價と爲替の關係を解してその軌を一つにして居る。

然らば金本位時代の爲替相場に對して兩者は如何なる態度を持して居るか。カツセル教授の購買力平價説は、金本位時代に於ては、只爲替相場變動の範圍が金の國際間に於ける移動可能の爲め金平價を中心とし金輸送費以内に限らるゝと言ふ制限ある點が異なるのみにして、依然としてその妥當性を失はないとせられる。(註)。此の場合に就てリカードは果し、如何なる態度をとつて居るであらうか。

彼は曰く社會の幼稚なる時代製 技術が未だ多く進歩せず總ての國の生産物が略同様なる場合に於ける各國の貨幣價値は、主として金産地よりの距離によつて決定せられる。然し社會の技術其他の進歩により一國が或る貨物の製造に於て他國に優越せる場合には貴金屬の價値は勿論金地よりの距離により影響されるけれども、主としてその生産の優越なる事に支配されると。(Principles of Political Economy and Taxation edit. by Conner 352) 斯くりカードは金本位國間に於ける貨幣——貴金屬——價値の相異即ち一般物價の相異を考へた。即ち金産地より遠くへだたれる國に於ては金輸送費の大なる爲め貨幣價値大にして物價低く、また製造工業の優越國は輸出貿易により金の流入を結果する爲め貨幣價値小にして物價高しとなして居る。何れの點より見るもポーランドと英國とを比較すれば前者に於ては貨幣價値高く物價低く、後者に於ては貨幣價値低く物價高しとなして居る。(352) 而して斯くの如きよの高き貨幣價値——例へばポーランドの貨幣

價値の英國のそれに比して高き如き——は爲替の上にて示されない。たとへ一國の小麥及び勞働の價格（一般物價）が他國に比し一〇、二〇或は三〇パーセント高くとも爲替手形は依然として平價にて取引されるであらう。(222)されば爲替即諸國間の貨幣價値の比を云爲する場合には、吾々は決して夫々の國に於て貨物によつて評價せられたる各國の貨幣の價値を参照してはならない。爲替相場は決して穀物織布或は其他如何なる貨物たるを同はずそれによつて現はされたる貨幣の價値を比較する事によつては確められず、只一國の貨幣の價値を他國の貨幣によつて評價する事によつてのみ確めらるゝものである。(223)

以上の如くりカードは金本位國間に於ける國內的の一般物價即ち貨幣價値と爲替相場との關係を消極的に解し金本位時代には不換紙幣時代に行はれたる購買力平價説は其妥當性を失ふて居ると主張するかに見ゆる。

然しながら地金騰貴論に於て彼の言ふ所を見れば必ずしも然らざるを發見するであらう。即ち銀行の發生以前に於ては貨物流通具たる貴金屬は各國間に於て支拂の必要だけの程度に應じて分配され、斯くの如き状態に於てはその貴金屬の價値は何所に於ても同一である。此の場合貴金屬は各國間に於て移動する事はない。

金銀も亦他の貨物と同様に内在的價値を持つて居り、それは金銀の稀少の程度、之れを得んが爲めに要する勞働量及び之れを産出する鑛山に於て使用せらるゝ資本の價値に依つて定まる。他面に於て貨幣として用ひられたる金銀の量の増減は貨幣が交換取得する貨物の量の多少を來す。而して貨物流通の要具たる貨幣の量は多きも少きもその職能をつくす事を得る。然しながら國際間に於て商取引發達の程度に應じて金銀の移動行はれ、その程度に應ずるに至つて止む。此の時に於て各國間の對外貿易は平衡し金銀の價値は均一とな

20 (High price of Bullion, Economic Essays edit. by Gonner 21)

新しき金銀鑛山の發見により貨幣たる金銀の増加する時はその價值は減少し、他の一般貨物の價值を律する法則 支配され金銀の輸出を誘致する。之れに反して貨幣たる金銀の増加なくも、銀行が貨幣代用たる通貨を供するに至る時は前の場合と等しく貨幣の價值減少し金銀の流出を見る。(32)

國際間の通貨の價值は永く異り得ない。また各國に於ける通貨の過剰は永くそのまゝにてはあり得ない。而して各國に必要な通貨の割合は自らその國々によりて定まり之れが維持せんとする傾向を持つ。例へば英國一〇・佛國五、和蘭四の割合を保つ様に落付かんとしその絶對額は二倍三倍となるも妨げず、此の場合物價は二倍三倍となるも金銀の輸出入は起らない。(34)

以上の如くリカードは金本位國間に於て國內的貨幣價值と爲替相場即ち貨幣の對外的價值との一致を消極的に考へると同時に、他方に於て金の國際間に於ける價值の均一、即ち各國に於ける貨幣價值乃至一般物價の均一、即ち貨幣の國內的價值と對外的價值の一致せんとする傾向を肯定的に考へて居る。

斯くの如く相反する如き二つの思想はリカードに於て如何に處分せらるべきか。兩者は兩立し得ずして互に他を排すべきか。然らばリカードの眞意は果して何れにあるか。又爲替理論として何れを肯定すべきであるか。若し兩者が兩立するとせばその關係は如何に決定さるべきであらうか。

註 前掲田中金司教授論文。

四

リカードの勞働價值説と需要供給論及び兩者の關係に就ては私は概に別の機會に於て詳論し、また此等諸理論の貨幣價值に對する關係も亦既に之を述べて居る。(註一)

一般に貨物の交換價值は所要勞働量乃至生産費に比例して決定され、同一生産物に就て所要勞働量或は所要生産費に相異なる場合は其貨物の交換價值は最高所要勞働量或は最高生産費に比例して決する。斯く貨物の交換價值が最高生産費にて決定さるゝは、社會に於てその最高生産費を以て生産さるゝ貨物をも需要さるゝが爲めであつて社會に於ける其の貨物の需要供給がその點に於て平衡したが爲めである。即ち勞働價值説と需要供給論とは相俟つて貨物の交換價值を決定する理論であり、勞働價值説は交換價值の生産費の方面よりの説明をなし需要供給論は貨物の社會的流通關係を規定し、二者相俟つて貨物の交換價值理論をなすのである。而して社會的流通關係に於て何等の制限障害なく自由競争が完全に行はるゝ場合には貨物の交換價值は凡て所要生産費に一致し、社會的需要は此の點に於て社會的供給と投合する。然しながら社會的需要供給は種々なる障害によつて、流通關係の圓滑を缺き、此の點に於て投合し得ざる場合多く、貨物の交換價值は所要勞働量に比例して決定されざる事が多い。リカードは貨物の交換價值が所要勞働量に比例して決定されたる場合を自然價值と稱し、之れよりはづれて決定したる場合を市場價值と言ふ。

一般的交換要點たる貴金屬即貨幣の價值に就てもリカードは全く同一の原理に基くとして居る。既に拙稿需要供給論と貨幣數量説に於て述べて居る如く、リカードは貨幣價值變動論として需要供給論の一形態としての貨幣數量説を持して居る。即ち貨幣の價值はその數量の増減に反比例的に決定すると考へて居る。然しまた「金銀も他の凡ての貨物と同じく之れを生産し且つ市場に持來す爲めに要する勞働量に比例して其の價

値決定さる。」(Principles 1124) 而して貨幣の價值はその素材たる貨物の價值が變動する限り、不變であり得ない。故に貴金屬が貨幣たる場合には、貨幣の價值はその貴金屬の價值に従つて變動する。(Proposals for an Economical and Secure Currency, Economic Essays edit. by Gomner 21) 斯く貨幣とその素材たる地金との間に完全なる代替性流通性がある場合には常に貨幣價值は地金の價值に基きて決定する。銀行券の發行により通貨の増加ある場合もそれが兌換性を有する間は如上の關係に變りはない。此の場合の貨幣價值は自然價值に一致したるものであり貨幣價值の内容的説明として、所要労働量に比例して決定した場合である。而して地金と貨幣との間の流通性は完全なるべきを以て、兩者の價值に開きの存すべき筈なく、共に所要労働量に基きてその價值の決定を見る。次で社會に於ける需要供給の變動によつて貨幣價值變動し、所要労働量に基きたる自然價值より離るゝ事あるが、然し他の一般貨物の價值の場合の如く、その市場價值は自然價值に落付くべき傾向を持つものである。即ち貨幣の價值は貨幣數量説に従ひその數量の變動によつて無制限に變動し得るものであるが、常にその生産に要した労働量に比例して——一步を進めてジェー・エス・ミルに従ふならば絶對量としての生産費に合致して——決定さるべき傾向を有し、以て自然價值に落付くべき運命にありと言はねばならない。されば自然價值の世界に於ては貨幣數量説に基き流通關係的に變動する貨幣價值は、貨幣素材たる地金の生産費に一致する。貨幣と貨物との數量的變動により貨幣價值が騰貴する時は貨幣價值と地金の生産費とに開きを生じ、從來より生産條件の悪しき鑛山も採掘せられ、金の増加となり従つて貨幣價值の下落となる。斯くして再び貨幣價值と地金の生産費と一致し自然價值の世界に落付くのである。即ちミルが貨幣の價值を現實に決定するものは一般の貨物の場合と同じく需要供給の關係なれども終局に於て貨

幣の價值を調整するものは生産費であると言ふ所以である。(註二)

斯くの如き自然價值の世界に於ては、貨物と貨物との交換比率も、貨幣と貨物との交換比率も、凡て所要労働量乃至所要生産費に比例的に決定する。然しながら貨物に對する需要供給關係の變動により、貨物の交換價值が自然價值より逸脱して決定する如く、貨幣の價值も自然價值より離れたる市場價值にて決定する事が普通である。而して貨幣の價值が市場價值の落付くべき點としての自然價值に一致したる場合に於ける一國貨幣の存在量は、其の國の貨物と貨幣間の交換比率が自然價值狀態に於ける貨幣の需要量であらねばならぬ。但し自然價值狀態に於ける貨幣の需要量以上に或は以下に於て貨幣が存在し居る場合に於ても、個々の貨物間の交換比率——貨幣を介しての交換比率も——は不變であり、貨幣額にて現せる貨物の價值の變化も亦單なる名目的變化である。然し此の場合貨幣の貨物に對する交換比率は勿論實質的變動をなし、貨幣價值は自然價值より脱離するのである。

以上述べたる自然價值狀態に於ける貨幣の需要量及びそれ以上或は以下の貨幣の存在量の問題は、一國內即ち同一價值單位を有する貨幣制度の下に於て考へられたるものであるが、此の關係を國際間に於ける貨幣即ち金の分配として考ふるならば如何なる規則となるであらうか。

思ふにリカードにとつては國內に於ける貨物の交換と國際貿易との差異は、金本位國間に於ては本質上存在しない。只國內に於ける流通に於ては同一價值單位を有する貨幣又は之れによつて兌換せらるべき銀行券を以て通貨となすに反し、國際貿易に於ては通常價值單位を異にする貨幣に依る差異があるのみである。即ち國際貿易に於ては貨幣間の交換即ち爲替が存在する點に於て國內的取引と異なるのみ。然も各國の貨幣は素

材として金を包含し且つ金の國際的移動は自由なるべきを以て爲替は理論上一個の換算に過ぎない。また爲替相場の變動に於て國際貿易の國內的取引と異なる本質を見出さんとする論者があるかも知れないが、一國內に於ても地域廣きに亘り且つ貨幣流通關係の圓滑を缺く場合には爲替相場——或は國內的送金を爲替に關連して手数料の形をとる事あるかも知れないが——に等しき現象を見るものである。斯く考ふれば國際貿易と國內取引とに於て本質上區別すべき根據は小くともリカードにとつて存在し得ない。(勿論實際問題としては異なる)果して然らば金本位國間に自由に貿易が行はるゝならば、夫等の國々は金及び貨物一般に關して同一市場内に包含せられ、上に述べた如く貨幣貨物間に同一自然價値の世界を出現し、或はまた貨幣數量の増減により自然價値的貨幣價値より離るゝも、各國に於ける貨幣價値乃至一般物價が一率に騰落し單なる名目的變動をなすに過ぎない。而して貨幣と貨物との交換比率は、貨幣の存在量が各國を總括して自然價値狀態に於ける貨幣の需要量に一致したる場合には、五の所要勞働量に比例して定まるが、然らざる場合は貨幣と貨物との交換比率は所要勞働量に比例せず自然價値と離れたる市場價値に於て定まる、勿論後の場合は自然價値と市場價値との關係に基き前の場合に落付かんとし、貨物貨幣間の交換は自然價値に於て決定せんとするものである。

以上の如き狀態にありと假定せる世界市場を再び國々に分割し其の間に於ける貨幣——金——の分配を考ふるならば、貨幣即金は國々の取引に應じて必要な割合に分配される。即ち「貨物流通の要具たる貴金屬は、各國間に於て支拂の必要だけの程度に従つて分配され、斯くの如き狀態に於てはその貴金屬の價値は何所に於ても同一である。即ち此の場合貴金屬は各國に於て移動する事はなし。」(前掲 *High Price of Bullion*)

§1.)

斯くの如き状態に於ける世界市場に於ては貨幣と貨物との交換比率が自然價值より脱離し居ると否とを問はず各國の物價は同一水準にありて貨幣即ち金の夫々の國に於ける價值即ち購買力は同一である。例へば磅の英國内に於ける購買力と其の法を經由しての佛蘭西に於ける購買力は同一である。即ち二國間の爲替相場は二國の貨幣の金含有量の比率即ち Gold parity に一致し、然もそれぞれの貨幣——金——の夫々の國に於て有する購買力は相等的しい。換言すれば各國の貨幣の對内價值と對外價值とは一致し爲替相場は購買力平價と一致するのである。即ち國際間の金及び貨幣の取引は斯くの如き状態に落付かんとするの關係にあるものである。

註一 拙稿スミスとリカードの勞働價值説に就て(商學研究第三卷第三號)及び需要供給論と貨幣數量説(商學研究第四卷第三號)此の二つの拙文は本論文と合して一體をなすものである。

註二 J. S. Muel Principles of Political Economy BK III Chap. IX 此の點に就て貨幣の價值が地金の價值を決するものてシル、リカード等の考へを否定する論もあるが、然し正統學派の自然價值と市場價值との關係を理解するならば、此の論難は必ずしも當つて居なす。(Nicholson: A Treatise on Money and Essays on Monetary Problems, P. 71 山崎教授貨幣銀行問題一斑第二篇第三節。)

五

國際間に於ける貨幣の分布にして貨幣對貨物の交換比率が世界市場に於ける自然價值に一致する如く行はるゝ時、又は此の分布状態と同一割合を保ちて行はるゝ時は、貨幣の對内價值と對外價值とは一致するだけ

ども、貨幣の國際間に於ける分布が斯くの如き状態を離れて行はるゝ時は、リカードの「國際間に於ける商取引發達の程度に應ぜざる金の分配」である。此の後の場合には同一量の金の有する各國に於ける購買力は等しくなく即ち各國の一般物價は同一水準を保たない。斯くの如き貨幣價值の國際間に於ける相異はリカードによれば第三節前半にて述べたる如く、産金地よりの距離、生産技術の進歩の程度に基きて起るとせらる。此の場合に於ける爲替相場は金の移動が自由なる爲め依然として Gold parity に一致しその變動も金の輸送費以上に出でない。即ち爲替相場は購買力平價と一致せず、リカードの「爲替即諸國間の貨幣價值の比を云爲する場合に吾々は決して夫々の國に於て貨物によつて評價せられたる各國の貨幣の價值を参照してはならぬ」と言ふ所以である。

然しながら斯く物價の國際的水準に高低ありて貨幣の各國に於ける價值に差異ある状態は決して恒久的安定状態ではなく、金と貨物の國際間に於ける移動によつて兩者の適當なる分配即ち金と貨物の交換比率に於て、自然價值狀態或は之れと同一割合に基きて金の分布が行はれんとする傾向にあるものである。換言すれば金は同一價值にて支配される世界市場に於て偏在する事なく分布するに至るのである。斯くして貨幣價值の國際間に於ける相異消滅し、爲替相場と購買力平價とは一致せんとする。而して此の傾向をリカード自身が認めて居る事は論を待たない。即ちリカードの購買力平價說に對して抱く否定と肯定は決して矛盾するものではない。

斯く國際間に於て物價が同一水準に在らざる場合と、同一水準にある場合とを問はず、金本位國間に於ては爲替相場は Gold parity を中心として金輸送費以上に騰落しない。故にリカードにとつては金本位國間の

爲替相場を國際物價の比較によつて確むべからず金の含有量に其の基礎を置く貨幣間の交換比率のみによつて定むべきものであると爲す所以である。而して國際物價に高低あるも均一たるべき傾向を有し、貨幣と貨物との交換比率は自然價值に一致せんとし、以て爲替相場と一般物價との關係が一致し、爲替相場は購買力平價と合致せんとするものであり、リカードも亦之れを明かに認めて居るけれども只爲替相場を確むるため物價を以てせずして金を以てしたるのみである。(註)

註 *Princ. Pol. 353* に於てリカードは次の様に言つて居る。「各國間に必要なだけ貨幣が分配された場合に於ても各國間の貨幣の價值は均一しない。之れ各國貨幣の多くの貨物に對して有する所の價值が十或は二十パーセントも相異して居るからである。此の場合にも爲替相場は平價を保つ。之れはリカードの「國際間に適當に金が分配されたる場合金の價值即ち各國に於ける購買力が均一する」と言ふ考へと矛盾する如く見える。然し之れは貨幣の國際間に於ける分布が適當なる場合貨幣價值が均一すると言ふリカードの主張と相反するものではない。何となればリカード經濟原論の佛蘭西譯に加へられたる *J. B. Say* の註釋に見ゆる如く、金の國際間の分布が適當なる場合にも貨物の性質により或は法制によつて貨物の運送費其他の費用が金のそれに比し大であり、然も國によつて異なるが故に國によつて多少異なる物價標準を持つのである。従つて之等物價の相異は本質的のものでなく貨幣の他の貨幣に對する交換比率も金の輸送費の範圍にて動くと同様で國際間の貨物及び貨幣の交換比率が自然價值狀態に落付きたる場合にも此の種の開きはあるものと見る。(Reverdo: *Des Principes de l'Economie politique etc.*, traduit par F. S. Constanco, avec des notes explicatives et critiques par J.-P. Say. Tome Premier p. 232) 但し此の考へによつてもリカードが一定の範圍内で購買力平價説を抱きながら爲替相場を貨幣で考へて物價で考ふる事を望まざりし事を知り得る。即ち不換紙幣時代に於ては物價と爲替の關係は主として

物價が規準となり、金本位時代に於ては爲替が規準となると考へ得られる。

六

以上述ぶる所によりリカード及びカツセル教授の學説によつて不換紙幣時代及び金本位時代に於ける爲替理論殊に購買力平價説の性質を稍と明ならしめ得たと信ずる。以下尙兩時代に於ける爲替理論殊に購買力平價説の異同を論じ之れとリカードの自然價值概念との關係に及び以て購買力平價説の妥當性に關し一面的觀察を試みたいと思ふ。

既に繰返し述べた如く金本位時代に於ける國際間の金の分配は、その價值が到る所に於て同一たるべき様に行はれる傾向にある。此の場合若し貨物一般なる概念を假定するならば、貨物一般も亦各國に於て金に對し等しき購買力を有する様に移動したものと見る事が出来る。即ち購買力平價と爲替相場は Gold parity に於て一致する。之れを金及び貨物の生産費的關係より見れば、(一)各國に於て自然價值に基きて兩者の交換比率が決せられたる場合と、(二)此の自然價值狀態に基きて行はれたる金及び貨物の國際的分配に比例して、兩者の分配が行はれたる場合である。而して後の場合即ち貨幣と貨物との交換比率が自然價值と離れて決したる場合は貨幣の供給が生産費によつて調整せられ自然價值に一致すべき傾向を持つて居る。

斯くの如き關係は金の移動が自由なる爲めに結果する事實であつて、爲替相場は金平價を中心とし金輸送費の範圍内にて變動し、爲替相場と交互に影響すべき物價の變動も、此の範圍内に於てのみ存する變動である。即ち金本位時代の爲替相場と貨幣の國內購買力即ち物價との間に存する相互的吸引作用は、金輸出入點

の範圍内の問題であり國際物價水準にそれ以上の差異がある場合には物價のみが爲替相場に引付けらるゝ關係にある。概して言へば金本位時代には物價が爲替相場に隨はんとする關係にある。而して之等國際間に於ける貨物乃至貨幣の流通關係は同一世界市場内に於て凡てが自然價值に落付くべき理論上の性質を有する。即ち流通經濟に於ける需要供給の投合と生産費とが調和し *in equilibrium* なる自然價值の世界に到達せんとする關係が存在するのである。

然らば不換紙幣時代の爲替理論としての購買力平價説は如何なる性質を持つて居るか。カッセル教授の説く如く、外國貨幣に對す需要は、その外國貨幣がその外國に於て有する購買力に對する需要であると見る事が出来るが故に、此の場合に於ては爲替相場は國際間に於ける貨幣購買力の比に隨從する事は當然であり且つ斯くの如き方向が主流であると見得る。然しまた一國貨幣の爲替相場が低落せる爲めに貨物の移動を刺戟し、以て物價をして爲替相場に隨從せしむる事あるを否定し得ない。而して國際間に共通貨幣の存在せざる爲め個々の國內的には一般物價が考へられ得るも、國際的に見て貨幣對貨物の關係によつて生ずべき一般物價即ち國際的物價水準なるものは存在しない。即ち通貨の方面より見て、各國の物價の間には金本位の場合に存する如き關係なく各國物價は各自獨立する。之れカッセル教授の主張する如く歐洲大戰の開始以後に於て一國の物價騰貴は他國の物價騰貴の原因とならなす所以である。斯く各國の物價乃至貨幣價值の間に均一となるべき傾向は存在しないが、然し爲替相場が物價變動に應じて變動するを以て金本位時代の各國物價を基準とし續いて變動する貨幣價值に對し爲替相場變動を考量する時は、各國物價の大體の比較だけは出來得る理である。

而して國際間に於ける貨物の移動は自由なるを以て、貨幣對貨物の關係たる物價水準の均一は存し得ざれども、各國間に於ける貨物の交換比率が自然價值狀態に落付かんとする傾向は金本位國間に於ける場合と何等異なる所はない。即ち物價の開きと爲替相場の變動とは無限に繼續し得べきも貨物間の交換比率は國內的たると國際的たるとを問はず自然價值に落付かんとするものである。

七

以上述ぶるが如く金本位時代の國際貿易は、國際間に於て貨物と貨幣及び貨物と貨物間の交換價值が、凡て自然價值に落付くべき理論上の構造を有して居る。不換紙幣時代に於ては貨物と貨幣との交換比率が全く目名的のものであつて、自然價值なるもの存在せず、只國際間に於ける貨物間の交換比率のみが自然價值に落付かんとする關係を有する。而して斯くの如き自然價值、不換紙幣時代に於ては貨物間にのみ存し、紙幣と貨物とを對立せしめて發生する物價に全く關係せず。従つてまたその物價と變動を共にする爲替相場にも亦關係しない。然しながら金本位時代に於ては各國物價に甚しき高低ある場合に物價は金輸送點以上に出でざる爲替相場に引付けられ、然る後の金輸送點以内に行はるゝ爲替相場の變動は物價と交互に影響して常に爲替と物價の一致を來さんとする。而してその一致はまた世界市場に於て貨幣及び貨物に就て自然價值に落付かんとするものである。

斯くの如き國內的及び國際的の自然價值なる靜的狀態は凡ての貨物が自由に流通し自由競争が完全に行はるゝ事を前提として考へられるものである。之れに對して障害ある場合は此の自然價值なるものは考へられ

ない。これと同様の關係は購買力平價説にも存する。即ち國際間に於ける貨物の移動——金本位の場合は金の移動も——が完全に行はれ然もすべての貨物が國際貿易の對象たる事が物價と爲替の一致する爲めの條件であるからである。従つて實際的問題として購買力平價説は二國間の貿易關係が密接して居れば居る程正確に適用され、その關係が稀薄であれば、その程度に應じて物價と爲替との一致も困難である。而して購買力平價説が如實に行はるゝ事は一國貨幣の對內的及び對外的購買力が一致する事、換言すれば貨幣に就て無差別の法則の行はるゝ同一市場が考へられる時である。而して金本位時代に於ても國際間に於ける物價平準に高低ある事は普通なるべきを以て、リカードが經濟原論に於て述ぶる爲替理論は言はゞ市場價值の世界に關するものであつて、實情に答ふるものと言はざるを得ない。(昭和二年十二月三日稿)